

天下の旗に
そむ
叛いて
南原幹雄

実業之日本社



天下の旗に叛そむいて

南原幹雄

実業之日本社

天下の旗に叛いて

© 南原幹雄
一九九〇

一九九〇年 一月三十日初版第一刷発行

著者 南原幹雄

発行者 増田義和

印刷 大日本印刷

製本 共文堂

発行所 実業之日本社

東京銀座 一―三―九

振替 東京 一―三二六

電話東京五六二―二〇五一(編集)

五三五―四四四一(販売)

天下の旗に叛いて／目次

流浪公子

結城評定

旗挙げ

大包围

総攻撃

風雲小山城

策謀

父来^{きた}る

195 168 140 112 86 60 34 7

結城寺炎上

離間

和平会談

落花落城

309 281 250 222

装幀／安彦勝博

天下の旗に叛そむいて

流浪公子

一

信州、上州の山々はまだ山腹から頂きが雪におおわれている。

二月とはいえ、この地方では、春はあさい。

峠から、西に浅間、東に榛名、北に鼻曲、南に妙義がのぞまれる。碓氷峠は上信の国境である。上州松井田の方面から雪どけの風が峠へ吹きあげている。

そのとき、大量の雲が湧くように、峠の頂きにくろくろと軍勢があらわれた。騎馬を先頭にした軍勢は旗、差物を風になびかせ、くろい熔岩のながれのように峠をくだってきた。

やがて、その全貌があらわれた。旗や差物の家紋は三階菱と五七桐。松皮の家紋も見える。いうまでもなく、信濃守護小笠原政康の軍勢である。その数は約二千。政康自身がひきいる軍勢とわかる。

小笠原の軍勢は上信の国境いをこえて、上州へ駆けおりてきた。この当時において、信州の軍が上州へ入りこんでくることには、いくらかの意味がある。

室町幕府は六代目の將軍義教をむかえているが、鎌倉公方いづが成立してからというもの、関東八ヶ国にくわえて、伊豆と甲斐をくわえた領域、さらに奥羽の地も鎌倉公方が支配するところとなっていた。つまり、小笠原の軍勢は將軍の直轄地から鎌倉公方が支配する領域に入ってきたことになる。すこし以前であつたなら、これは信濃守護の関東侵犯という事件に発展する。

峠の道は東山道とうざんどう（のちの中仙道）である。軍勢は松井田方面めざしてすすんでいった。

小笠原の軍勢は侵犯が目的ではなかつた。將軍義教の命令によつて、昨年（永享十一年）二月にほろんだ鎌倉公方足利持氏の遺児二人の探索に関東へむかつたのだ。

京都の將軍と、鎌倉公方とははじめから不仲で、宿命的な対立をつづけていた。初代の鎌倉公方足利基氏もとよしと二代將軍義詮よしあきらも仲はよくなかつたが、二代目鎌倉公方氏満うじみつははつきりと三代將軍義満みつにとつてかわろうとする野心をいだいていた。この両者の時代は騒動にまではいたらなかつたが、三代目鎌倉公方満兼みつかねは實際に幕府打倒の陰謀をたくらんだ。

そして四代目鎌倉公方持氏の代になつて、東西の乱は勃発し、〈永享の乱〉がおこつた。將軍義持が歿したとき、義持には嗣子ししがいなかつた。持氏は自分が將軍にむかえられると信じていたが、結局、幕府の有力大名たちによつて、義持の弟で出家して天台座主ざすになつていた青蓮院義円しょうれんいんぎえんが推され、將軍義教となつた。このときから、持氏は謀叛わはんをかんがへはじめた。

持氏は関東全域に軍令を発したが、もともと鎌倉公方のたのみとする関東管領上杉憲実のりざねが幕府

側についていたために、鎌倉公方の軍ははじめから劣勢にたつた。小田原附近において鎌倉公方の軍は大敗をこうむり、鎌倉を焼かれ、持氏の居館も焼けおち、戦の帰趨は決定した。持氏は武蔵名寺に入つて剃髪し、和をもとめたが、いれられなかつた。

持氏は鎌倉の永安寺ようあんじにうつされ、憲実の調停に期待をかけたが、これも義教に拒否された。義教の厳命で憲実が永安寺を攻め、持氏は叔父満臣みつおみ以下三十余人とともに自刃し、ここに四代、約百年間にわたつてつづいた鎌倉公方はほろんだのである。永安寺三重塔にこもつていた持氏夫人以下数十人の女房たちも、火をはなれて、ことごとく焼死した。

持氏の嫡男義久けんおうまる（賢王丸）もこのときに死んだが、二男春王丸はるおうまると三男安王丸やすおうまるは持氏の近臣にもなわれて、ひそかに鎌倉を脱していた。まだ幼児の四男永寿丸えいじゆまるも乳人めのとにつれだされて逃げおちた。幕府では持氏の遺児三人の遺体が見つからないので、関東一帯にきびしい探索命令をくだしていたのである。

碓氷峠をこえた小笠原政康の軍は東山道を松井田、安中あんなか、板鼻……とすすんでいった。

信濃守護はかつては鎌倉公方へのおさえの役目をもつており、歴代、將軍からの信任はあつた。小笠原家は由緒ある武門の名家で、当代の政康は野心もなみなみならぬ人物である。鎌倉公方なき今の関東は將軍の直轄地になつていとはいへ、きわめて不安定で、おおいなる波瀾をふくんでいる。將軍への忠勤しだいによつては、政康の野心がふくらむ余地もあつた。

持氏の遺児探索に政康がもつとも熱心であるのもそのためである。政康は各地にはなつてゐる乱発らんぱつの情報によつて、春王丸と安王丸の消息をつかみ、いちはやく將軍に報じた。

二千の軍勢は上州倉ヶ野から東山道とわかれ、日光道（のちの例幣使街道）へすすんだ。

日光道は東山道よりもやや道幅はせまいが、高崎以東は広大な関東平野で、道は平坦である。

進軍のさまたげになるような障害もない。

道々の国人豪族たちで小笠原の軍勢をはばむ者もない。国人領をとりすぎるとき、挨拶や意向をうかがいにでてくる国人豪族はいるが、進軍の趣旨をきくと、みなていねいな作法で、軍勢の通過するのを待つてひきあげていくのがつねだ。

栃木をとりすぎようとしたとき、前方から、砂塵を蹴たてて、十数騎の騎馬がちかづいてきた。

「お待ちあれ」

さむらいえぼし

侍烏帽子、直垂に馬乗り袴をはき、弓を背にした騎馬の先頭にたつ若武者が、軍勢をさえぎつ

ていった。血気さかなな容貌が十数個そろっている。いずれも土くさく、荒々しい関東武者の風貌である。

「当方は信濃守護小笠原政康一行である」

軍勢の先頭の中から一人でできた侍大将格の者が馬をおりてこたえた。

「われらは、小山大膳太夫広朝の家人である。見れば大勢の軍をもよおされておるが、どちらへむかわれる」

軍勢を制した若武者も馬をおりてたずねた。いかなる名分、名目があろうと、自国領を無断で堂々と軍勢に横切られては、領主の面目にかかわるからだ。

小山大膳太夫といえ、栃木からほどかい小山に拠る鎌倉時代からの武門の名家である。関東の豪勇とうたわれる結城氏と同族で、〈関東八家〉のうちにかぞえられている。その誇りが騎馬武者たちの面々の態度にあらわれているのだ。軍勢の中に小笠原政康自身らしい姿を見ても、ひるむ気配はなかった。

「わが小笠原の軍勢は、京都におわす將軍の命令によつてもよおしたものでござる。かつての鎌倉公方足利持氏の遺児探索のために、この地を通過いたすしだいじゃ」

相手もいささか胸を張るようにこたえた。

「して、その行先は？」

関東の若武者は二千の軍勢におじけることもなくたずねた。

「日光でござる」

「日光に、鎌倉公方の公子はおいでになるのか」

若武者がかさねてたずねたとき、相手の目がけわしくひかつた。

「かつての鎌倉公方足利持氏は天下の謀叛人なるぞ。その遺児たちはまぎれもなく謀叛人の子でござる。言葉に気をつけられるがよろう」

居丈高な言葉が若武者にとんだ。

若武者たちは急所をつかれ、はつとなつた。理は相手方にある。関東八家はいずれも、かつては鎌倉公方を推戴し、その命令を奉じてきた家柄である。長い歴史のなかでは、関東の豪族間にいろいろな相剋や離反もあつたが、鎌倉公方への忠誠心は関東の豪族たちの根底にみなひそんで

いる。まして今やその家柄もほろび、天下の孤児となった公子たちへの同情があるのはいたしかたない。常日ごろの心情がつい表にあらわれ、はからずも信濃守護の家来のきびしい指摘をうけた。

小山の若武者たちは一瞬、困惑した。

「そちらのおっしゃるとおりでござる。鎌倉公方の遺児は謀叛人の子であることにまちがいござらぬ。その遺児探索のためならば、どこの豪族の領地をとりすぎるも非はござるまい」

その若武者は平静にもどつてそうこたえた。

「わかったなら、かまわぬ。以後、お氣をつけられたい」

勝ちほこつたような返事がかえつてきた。

「十分に氣をつけよう」

その言葉がおわるのを待たず、小笠原の軍勢はふたたびすみだした。

二千の軍勢は悠々と小山領を通過して、日光へ北上していった。

小山の若武者たちはそれを声もなく見おくつた。

二

小笠原の軍勢は、翌日、日光にあらわれた。

日光は重畳たる山岳のなかに展開する。その地域は、西方は上州利根郡、北は岩代国南会津と

峰背をもつて境界とし、南は足尾、古峰原、多氣山にいたり、東方は鶴頂山、塩原山につらなる。周囲四方の山々は山腹以高が雪につつまれている。関東の屋根やねといつてさしつかえないところである。

古代から、日光は関東の名山であり、山岳信仰の地であつた。下野の名僧勝道上人しょうどうしやうにんが延暦元年、登頂して、男体山頂に二荒山神社ふたたらやまじんじやをひらいた。それに先だつ天平神護二年、山内に四本竜寺を創建し、その後、満願寺、光明院と名称をかえている。

日光の山々に吹く風は、まだ冬のようにつめたい。

その風に追われるように二千の軍勢は山をのぼつてきた。

途中から山道は残雪の中にかくれがちになつた。のぼるにしたがつて、山はふかくなる。ふかくなるにともない、山の冷氣がきびしくなり、身を切られるようだ。

人馬は白い息をはきながら山をのぼつていった。途中で凍りついた雪に足をとられそうになる騎馬もあつた。

軍勢は二荒山神社の麓までのぼつてきた。

伽藍がらんはすでに神域である。前は大谷川に対し、東北は稻荷川に接する。古松老杉が鬱蒼とあたりをおおい、梢をまじえ、社地をとりかこんでいる。神気がみなぎり、おのずから荘嚴な雰囲気は一山がつつまれている。

小笠原政康も、さすがに軍勢をいきなり神域に侵入させることはしなかつた。神域の入口に軍勢をひろく配置し、一山を支配する行道上人ぎやうどうしやうへ使者をおくつた。

一山の大家僧侶たちは、小笠原の軍勢の来山にびりびりと神経をとがらしていた。山岳信仰の僧侶といえ、修験しゆげんの荒行にたえる行者でもある。もし軍勢が無法に入山してくるならば、その前にたちふさがるくらの気概、武力を持ち合わせていた。

使者にえらばれたのは小笠原家の重臣塩尻右衛門助しおじりうゑもんすけである。右衛門助はわずか十騎ばかりの供をひきいて、行道に面会をもとめた。

双方は僧坊の一室で対面した。

行道はただ一人、墨染姿すみぞめで一室に入ってきた。齡六十路よわいそじに入った老僧であるが、荒行できたえた体はかくしゃくとしている。眉は半白であるが、顔には精気がうかがえる。

「わたしは、信濃守護小笠原政康の家来で、塩尻右衛門助と申す者である。じつは、かつての鎌倉公方足利持氏の遺児、春王丸、安王丸の二人がこの山内にひそみかくれているときいて、將軍の命をこうむり、主人政康みずから兵をひきいて当地まで足をはこんだしいにござる。もし噂どおり、春王丸、安王丸の兩人が山内にひそみおるならば、お上人の説得によつてお引きわたしねがいたい」

右衛門助は侍烏帽子、直垂姿で威儀をただしていった。

「それははるばるご足労をおかけいたしました。まだ雪のこのる当山までおいでいただいたのは恐縮至極と申すもの。当山に鎌倉公方家の遺児兩人がひそみくらしておるとははじめて聞くこと。もしそれが本当ならばゆゆしき大事じゃ。わざわざ信濃守護家の軍勢をわずらわすまでもなく、謀叛人の遺児をひとつらえて小笠原さまへ差しだす所存にござります。さりながら、当方にとつて